

聖句「肥えた牛を食べて憎み合うよりは／青菜の食事で愛し合う方がよい。」(15:17)

1. 《牛を屠る》 「BSE／牛海綿状脳症」という牛の病気が拡がって、米国から日本への牛肉輸入が全面禁止されたことがありました。所謂「狂牛病騒動」です。人間の罹患は「ヤコブ病」と言われますが、パレスチナ地方に多く見られます。そう言えば、聖書には「牛を屠る」話が多く見られます。「ルカによる福音書」15章の「放蕩息子の譬え話」では、放蕩に身を持ち崩した息子の帰還を、父親が祝宴で迎えます。「肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう」。単なる祝いではなく宗教儀礼、神と人との再契約、親子の「血の契約」だったのです。
2. 《肥えた牛》 それでは日頃、彼らは何を食べていたのかと言うと、主食は大麦小麦のパン、山羊、羊、牛から採った乳で作った凝乳、菘、玉葱、豆類だったようです。それさえも手に入らない貧民は、アカザの葉を摘み、レダマの根を掘って食べていました。「逾越祭」の「苦菜」はチシャはレタスの原種ですが、「箴言」に言う「青菜の食事」とは、このことです。米国の宣教師が中米を旅行していた時、グアテマラから来た難民に「あなたたち、アメリカ人の生活様式が私たちに殺している」と批判されました。日本の食用牛の消費量は米国の3分の1に過ぎませんが、私たちの生活も搾取の上に成り立っているのです。
3. 《青菜の愛》 レフ・トルストイに『イワンのばか』という民話集があります。老獺が悪魔が3人の小悪魔を使って、3兄弟を破滅させようとしめます。農民のイワン、兵隊のセミョーン、商人のタラスです。セミョーンには可能な限りの軍事力を、タラスには溢れんばかりの金貨を与えます。彼らは悪魔の思惑通り、行き詰ってしまいます。残るイワンの国を隣国の軍隊を使って攻撃させるのですが、お人好しのイワンの国民は略奪されるに任せ、泣いているばかりです。侵略した兵隊たちも皆、悲しい気持ちになって散らされるのです。1886年(明治20年)に発表された本です。日本は日清・日露からアジア・太平洋戦争まで、戦争に次ぐ戦争の道を進んで行きます。富と軍事力は平和を作ることが出来ません。